花譜序

君子之心不_レ失_ハ本然之樂_ヲ則凡滿_ル天地之間_ニ者心目之所_レ觸皆足_レ以爲_ル資_ニ其樂_ヲ之具_ト況花木芳艸尤可_ニ以玩賞_ス者乎然心可_レ寓_ニ乎物_ニ而不可_レ溺_ル乎物_ニ寓_ニ乎物_ニ者天理之所_ニ以樂_ム也溺_ル乎物_ニ者人欲之所_ニ以苦_ム也寓_{スル}與_レ溺之間不_レ可_レ不_レ察焉大凡愛_ニ玩花卉_ニ者古今人情之所_ニ同然_ク也不_レ隔_ニ君子與_ニ小人_ニ然君子之愛_ニ花卉_ニ也奚翅_ゾ耽_ニ艷色_ニ耶將_四以觀_ニ天地生物之氣象_ト顯_ル乎物_ニ而已非_下小人之役_ニ心於園圃_ニ而玩_レ物喪_レ志之比_上也嗚呼天地生物之氣象可_レ見而不_レ可_レ言能觀_ニ於此_ヲ者知_レ道也苟欲_レ愛_ニ觀花卉_ニ則養_レ之之道亦不_レ可_レ不_レ知也艸木之性各有_レ異故養_レ之之道亦各殊_ニ宜且佳木芳艸之生有_レ待_ニ於人力_ニ非_ズ若_三稂莠稊稗易_ニ於蕃茂_ニ也是培養之功所_ニ以不_レ可_レ闕也予曩有_ニ艸木之僻_ニ於_ニ植養之方_ニ也嘗聞_ニ其說_ヲ矣今既不_レ如_レ昔然於_レ心終不_レ忘頃養_レ病伏_ニ枕于艸堂_ニ纏綿_ト彌_レ

月^ヲ不^レ能^レ治^{ムル}ニ經書^ヲ於^レ是纂^下輯^{シテ}於嘗所^ト聞見^{スル}一與^ト所^ニ驗閱^{スル}一而作^リニ花譜^ニ三卷^ヲ以述^テ種^下植^シ之^ニ培^ニ養^{スル}之^ニ之法^ヲ可^{シト}備^フ他日^ニ之閒覽^ニ云爾^リ。

元祿七年中元日

貝原損軒書

篤信嘗謂學者之進德修業也固當勉強而不懈然不可拘迫拘迫則難久也須寬舒於心志愛養於精神如此則無局促之態而有優游之樂勉強與優游二者當並行而不相悖是君子一張一弛之道也夫勉強刻苦之餘暇從容緩步徜徉乎花園靜觀草木之生意而時試天機之不息吟花弄樹以悅心目是燕居之幽賞閑中之佳興也人生享斯清福不亦樂乎。

花譜目錄

上卷

總論

栽^{ウラ}樹^ヲ。下^ス種^ヲ。挾^{サス}枝^ヲ。附^レ壓^ハ法^ヲ。接^{ツケ}樹^ヲ。
 護^{マモ}養^リ。^{ナフ}

中卷

正月 四種 木二 草二

梅。山茶花。福壽草。金盞花。

二月 十一種 木十 草一

山^{チン}礬^{チヤウ}。杏^{アン}。辛夷^コ。小^ヒ櫻^{ガン}。垂^{イト}絲^ザ櫻^{クラ}。櫻^イ。李^リ。連^{レン}翹^{ケウ}。
 櫻^{エス}桃^ラ。山^ニ櫻^{ハム}桃^メ。玉^イ蘭^ト花^ク。

三月 三十八種 木十四 草二十四

桃。海棠。檀^ボ子^ケ。梨。薔^シ薇^{ヤウ}。月^チ季^{ヤウ}花^シ。玫^ハ瑰^マ花^{ナス}。
 酴^コ醪^ヤ。繅^ヲ絲^{ラン}花^{ダイ}。芫^シ花^{ケイ}。蝴^コ蝶^バ花^メ。笑^コ靨^バ花^メ。
 棣^ヤ棠^マ。草^ク棣^サ棠^マ。牡^ツ丹^ハ。躑^ツ躑^ハ。
 紫^フ藤^チ。華^ケ鬢^{マン}。楓^{マル}楸^{メル}。

鈴挂スツカケ。白及シラン。燕子花カキツバタ。鳶尾イチハツ。石南シヤクナンゲ。美人蕉メイジンキョウ。
 粉團テマリ。雪柳ユキヤナギ。茼蒿シユンギョク。馬蘭リン。白頭翁ハクダウウ。櫻草オウゴン。庭櫻テイオウゴン。
 紫荊樹スハウギ。鰈根エビネ。荒世伊登宇アラセイトウウ。仙臺萩ハギ。草牡丹クサビダン。
 米囊花ケシ。

四月 十六種 木四 草十二

菖蒲花ハコチウツギ。錦帶花テツセン。鐵線花テツセン。石竹キジンサウ。虎耳草ベニ。紅藍花ベニ。
 白丁花コフヂ。芍藥コフヂ。小藤コフヂ。杜鵑花サツキ。佛桑花アツサウケ。下毛シモツケ。
 卯花ダントククハ。美人草ダントククハ。檀特花ダントククハ。

五月 十五種 木五 草十

橘ヒヤウヤナギ。金絲桃ヒルガホ。鼓子花アツサイ。紫陽花クチナシ。梔子カンビ。剪春羅カンビ。萱草カンビ。
 夏菊ザクロ。石榴アフヒ。蜀葵ゼニアフヒ。黃蜀葵ワウスケ。五月菊ワウスケ。
 鷹爪レダマ。合歡子フリノキ。

六月 十七種 木一 草十六

蓮ヒヤクシツコウ。紫微花ホチヌキ。鳳仙花ホチヌキ。風蘭ユリ。百合ユリ。凌霄花ノウゼン。剪秋羅センテウワ。
 秋海棠アサガホ。牽牛花アサガホ。茶蘭テケルマ。金沸草カハホチ。萍蓬草クハハ。慈姑花クハハ。
 鐵色箭ナツスイセン。浮薔ナギ。飛廉ヲニノマエハキ。玉簪花ギボウシ。

下卷

七月 十二種 木二 草十

蘭ラン。東浦塞牽牛花カンボチヤアサガホ。桔梗ケイトウケ。雞冠花ムクゲ。丈菊ヒラガアズヒ。

龍膽草リンダウ。赭桐ヒキリ。紫菀シヲニ。睡蓮スイレン。白粉花ヲシロイ。午時紅ゴジクハ。

八月 六種 木二 草四

鹿鳴草ハギギ。木芙蓉フヨウ。木犀フミノナヘシ。女郎花ホクリ。獨頭蘭トリカブト。附子トリカブト。

九月 四種 草

菊キク。秋牡丹タウギク。鬱金ウコン。通和ツワ。

十月 四種 木三 草一

寒菊サンキク。枇杷サザンクハ。茶梅花クレナイノサザンクハ。海紅花ウメノサザンクハ。

十一月 三種 草

水仙スイセン。千日紅チジツコ。三波丁子サンハチジ。

十二月

臘梅カラムメ。迎春花ワウバイ。

右草木の花品凡百三十二種。此内木花四十五種。草花八十七種あり。此外草木の實、葉、木だちなごうるはしくて、花にあらざれども愛賞すべきもの多し。左に記す。

草 三十四種

蘭草フヂバカマ。菖蒲セキシヤウ。卷栢イハヒバ。石葦ヒトツバ。石斛ヒトツバ。苔ベンケイサウ。景天イハレン。佛甲イハレン。草ケ。螺麝草マメヅル。忍草シノア。貫衆キジノヲ。茅藤花カラタチバナ。麥門冬カラタチバナ。吉祥草カラタチバナ。珊瑚センリヤウ。細辛カモアフヒ。萬年青ヲモト。百部キジカクシ。霸王樹イロヘロ。竹子サ。籊子サ。芭蕉バセヲ。錦荔枝レイシ。蕃椒タウカラシ。芒ス、キ。知風草カゼクサ。濱木綿ハマユウ。木賊トクサ。鴈來紅ヌナハ。蕁アサミ。浮萍ウキゲサ。酸漿ホウヅキ。萬年松マンチンクサ。

木 三十三種

松カシハ。柏ヒンキ。檜イフキ。圓栢フジマツ。落葉松マ。羅漢松モミ。栴ヒヤクシ。榧カヤ。賢木サカキ。佐和羅木サワラギ。杉スギ。唐杉ヒメスギ。柳ソテツ。鳳尾蕉シユロ。櫻欄シユロ。櫻欄竹カヘデ。機樹カヘデ。冬青樹ニシキツ。衛矛アヲギリ。梧桐アツサ。黃楊木ツゲ。椎シイ。椿チン。梅茂登岐ムメモド。木國キンカン。金橘ダイク。橙ダイク。多羅葉タチバナ。枸杞クコ。讓葉ユヅリハ。平地木タチバナ。

右草木の花なきもの六十七種。凡花あると、な
きと、すべてかぞふるに百九十九種。其内木七
十八種、草百二十一種。

○右に記せし草木のうち、からの書にて吾いま
だみざる物多し。左にしるして、しれる人を待。

小櫻。垂絲櫻。櫻。草楝棠。華鬢。鈴挂。雪柳。櫻
草。庭櫻。鰓根。荒世伊登宇。仙臺萩。草牡丹。鐵
線花。風車附。白丁花。小藤。下毛。卯花。檀特花。
東浦塞牽牛花。茶蘭。白粉花。鹿鳴草。女郎花。千
日紅。通和。三波丁子。忍草。濱木綿。佐和羅木。
賢木。唐杉。梅茂登木。木國。多羅葉。讓葉。凡三
十六種

考用書目

齊民要術

種樹書

農桑輯要

農政全書

種果疏

花史

牡丹譜

詩經

山海經

爾雅

月令

史記

瓶史

居家必用

博物志

文選

杜工部集

物類相感志

崔豹古今註

荆楚歲時記

酉陽雜俎

本草綱目

柳々州集

時珍食物本草

閩書

事文類聚

鶴林玉露

朱子文集

救荒本草

三才圖繪

月令廣義

蠡海錄

潛確類書

事林廣記

天工開物

唐詩畫譜

天中記

園史

遵生八牋

墨莊漫錄

古今醫統

福州府志

養老壽親書

五雜俎

衡岳志

松江志

彙苑

倭書八雲御抄

萬葉集

文德實錄

古今和歌集

順和名抄

源氏物語

拾遺集

增鏡

朗詠

夫木集

枕草子

袖中抄

藏玉

蹇驢嘶餘

花譜卷之上

損軒編錄

總論

栽^ラ樹^ヲ

齊民要術曰^ニ、凡樹をうゆるに、正月を上時とし、二月を中時とし、三月を下時とす。○篤信ひそかに思ふに、春は生物のはじめなれば、草木の精氣^{せいき}さかんにして發生^{はっしやう}の力^{ちから}つよし。故に草木をうふによろし、就^{キテニ}中正月は陽氣^{やうき}發生のはじめ也。且又木の精氣、猶根に全くおさまりて、のぼらざる故根本堅固なり。うへて後やうやく發生^{はっしやう}にむかひて、活^{つき}やすし。故に樹をうふるに、正月を年中第一の上時とす。二月三月是につげり。夏は草木の枝葉ながくのびしげり、木の精氣^{まつたく}全く枝葉にあり。根にのこりたる生氣すくなくして、うつしうふれば、木の性をそこな

ふ。秋は陽氣すでにをとろへて、發生の氣すくな
し。冬は精氣根におさまりて發生せず。故に木を
うつし植るに春をよろしとす。餘の三時は宜しか
らず。若やむ事を得ずしてうへば、八九月は猶可
なり。又月令廣義曰、樹をうふるに冬至の十五日
以後、春の社日以前よし。又曰、冬至の前十五日
草木をうふべからず。天地の氣ふさがる故、うふれ
ども生長し難し。竹をうふるに尤いむ。

齊民要術曰、凡樹をうつすに、根の鬚をそこなふべか
らず。根盤を濶くほりて、根の宿土をさるべから
ず。諺に云、移^{スニヲ}樹無^レ時。莫^レ教^ニ樹知^ニ篤信おもへ
らく、木をうふるに春をよろしとする事、上にいへ
るがごとし。されども若やむことを得ずして夏秋
冬の間にうへば、かくのごとくすべし、根盤をひろ
くほり細根をさらずして、根盤の土全くだけざ
れば、何の時にても活ずといふ事なし。古人のいは
ゆる木をしてしらじむるなかれとは、かくのごと

くにするをいふ也。

木をほるに、大きな根はきりても害がいなし。細根ほそねは少
にてもきるべからず。根のまはり遠く廣くほるべ
し。小根をきらせじとなり。尤根鬚をきる事なか
れ。凡木をほるにも奴僕しもべにまかすべからず。みづ
から見て教をしゆべし。しからざれば、根をおほくきるゆ
へ木いたむ。うふる時は土をつく事實じつならずして
枯かれやすし。○木をほるには唐ぐはよし。つねの大
ぐはくあしう。木の根盤ねまはりを廣くふかくほるべし。か
ならずほる者に、かたくいましめて細根をきらし
むべからず。すでにほりて後、根盤くだけざるやう
に、繩なはにてよこたてよくからげたるがよし。持ゆく
道にて地にをくべからず。若道とをくして役夫やくぶや
すまば、じづかに地におくべし。植る時根盤のひろ
さ厚さをはかりて、かねてうふべき所の地をひろ
くほり、土をやはらげおくべし。是うへたる木の根
のびやすからんがため也。地面よりすこし高くう

ふべし。雨ふり地かたまれば、ひきくなる。又濕しつを
さけんがため也。○根盤の土なきは、たとへばその
かたち蜘蛛くものあしのごとし。其下必虚きよなり。植ると
きに、根の下に棒にて土をよく入べし。しからざれ
ば、根の下空虚くうきよにして土なし。いまだ植ざるさま
に、ほりたる所ところに水をおほくそそぎて、土をうるほ
して實じつにすべし。○植んとする時、木の方角をよく
正すべし。木に表裏あり。おもてを人の常にみる方
にむかはしむべし。又大枝は南へむかはしむべし。
手にて木をとり引うごかす事なかれ。根のまがら
ざるやうに、すぐに植ふべし。又根のさきのさがる
やうに植べし。あがるはあしう。只根の性にした
がふべし。うへおはりて土を半くたし、まはりを
よくつきかためて後、又土をおくべし。かならず
根盤の宿土ふるつちをつく事なかれ、ふむ事なかれ。うへて
のち水をそそぐべし。はじめより水うへにするも
よし。うへおはりて、まはりに竹木をふかくたて、

繩にてゆひつくべし。風にうごかしむべからず。長
き木は二三所ゆひ付べし。風にうごかさざれば大木
も活つぎやすし。風にうごけば小木もかれやすし。又
枝葉のおほきをいむ。枝葉すくなければ、やしなふ
所多からずして、根の生氣達たつしやすく、且又風に
うごかず。○根きれて木末たかき木は、梢をこと
ごとくさりすつべし、おしむべからず。大木をうふ
るには其根盤を大にし、其枝こずるをことごとく
さりてうふべし、活つぎやすし。○うへて後二三日に一
度水をそぐべし、半月にしてやむ。春うへたる
木は、當年の暑月なつおほひをし、しばく水をそぐ
べし。秋以後うへたる木は、來年の夏月しばし
ば水をそぐべし。しからざればかれやすし。
花あるときに、木をうつしうふる事なかれ。枯かれやす
し。つとじなごのやうなるつきやすき木も、花あ
るときうつせば枯る。

齊民要術曰、をよそ一切の樹木を栽うふるに、其陰陽をお

ぼえて、てんそき轉易する事なかれ。東西南北もどのもどくうふべし。

大木をばこずるをことぐくきり、小樹をばさらず。まづあなをふかくほりてより、木をうへて水をそそぎ、土を攪かきて薄泥のごとくにし、四方にうごかし、良久して泥土根の間に入て後土を下し、かたく築べし。上二寸は、かたくつくべからず。土和らかにしてうるほへるがよし。栽うゑ了て後、時々水をそそぎ、常にうるほはしむ。栽うゑて後うごかすべからず。手を以てとるべからず。六畜のふるゝをいむべし。

月令廣義二曰、凡木をうふるには、多おほく宿土を留、南に向枝を覺て、方位をかふる事なかれ。清糞せいふんと土と水と和して、泥漿どろみづとなしてうふ。三四日の後水をそぐべし。あるひは、めぐりに瓦かはらを立まはして、其うちに水をそそぐべし。

農政全書二曰、樹をうつすには、薦こしを以て、根をつみ、日にあたらしむるべからず。車にのせてしづ

かにひく。平たひらかなる處を引べし。穴をひろくふかくほり、根を直にうへて、かぶむべからず。木を多おほく傍にたて、ゆひつけ扶たすけおくべし。根動かざるやうにすれば、大さ丈許びかりの木も活つぱやすし。しげき枝をきりされば、風をまねかずしてよし。凡樹を栽るには西風を忌いむ。

又曰、凡果木をうふるには、先九月中の後、樹のまはりをほりて、繩を以てまはりをかからげ、ほりたるあとには肥土を入、水をそとぐべし。次の年正二月うつし栽べし。うふる所ひろくふかくほり、よき比にたぶしくうへ、土を半入るとき、棒を以土をつきかたくすべし。上に和らかなる土を加くわへ、地面より二三寸たかくすべし。土を木の根にはなはだ高く置べからず。雨ふらざるときは、毎朝水をそそぎ、半月にてやむ。○又曰、凡果樹をうつすには、穴をひろくふかくほり、先乾糞かんふんと土とを水にととのへてうふ。次月又土を根におほふべし。若

根に宿土なきをば、深泥の中にうゑて、引あげてよき所にうふれば、其根のびてつきやすし。必又三四日の後に水をそぐぐべし。木をうごかす事なかれ。

農政全書曰、凡諸木をうふるに、下弦の後、上弦の前

よし。下弦は廿二三日なり。上弦は七八日なり。地氣は随^テ月盛^ニなり。潮を

みて知べし。氣盛なるとき、木の生氣全く枝葉にあり。かるがゆへに、うつせば其性をやぶる。つぐときは其氣を失ふ。

凡樹をうふるに、根盤の土多く付たるが尤よし。土をおびずして、根のあらはれたるは、ほりて其根に風日のあたらざるやうにして、はやくうふべし。つきやすし。若風日あたり、ほりて久しく置、根かはけば生がたし。

史記に、其地にあらずしてこれをうふれば、生せずといへり。凡樹をうゆるに、其土地によろしきと、よろしからざるを詳にすべし。其土地によろし

からざる樹をうふれば長茂せず。長じて花さかず。
みのらず。實あれどもはやくおつ。山中は柿、栗、
柚、櫻、林檎等によろし。橘みかん、柑くわんぱんよろしからず。
海邊及沙地には蜜橘みかん、金橘きんかん、梨なし、小柚等はなゆによろ
し。柿栗柚かきくりゆなごよろしからず。山によろしき物は、
沙地によろしからず。沙地によろしき物は、山中
によろしからず。松梅はいつくの地にもよろし。
橘の類及蘇鐵は、寒國によろしからずして、暖國
によろし。信濃には菊なく、竹なし。北國にも菊
なし。竹はありといへども、はなはだすくなし。た
ちばな、くねんぼのるい、北國になし。是寒國によ
ろしからざればなり。

春夏うふる木は、根少きれたりといへども、其根は
やく生じやすし。發生の氣さかんなるゆへ也。秋
冬うふる木は、陽氣すくなき故、きれたる所の根
生せず。かれやすし。常に葉ある冬木は、夏うふる
もよし。

種樹書曰、南より北にうつせば、多くはかる。うつしてのち、臘月根のかたはらの土をさり、麥わらを厚くおほひて、火をつけてわらをやき、本のごとく土を厚くくはふべし。うつして後一二年もすぎずして實なる。若年々此法を用れば、南北なんぼくことならず。たとへば人の爪に灸するがごとし。

木をわかちうふる法 園史曰、八九月の間、本根のそばなる二三年になる新木あるを、其根の土をかきのけ、竹刀にて其本根につぶきたる根をさるべし。鐵刀を用べからず。又其根のひげをそこなふべからず。肥土黄土にうつしうふべし。又農政全書曰、木をわかちうふるには、樹木の根に小株を生ずるを、本根につぶきたる所をきりたちて、其ままをくべし。先ほりうつすべからず。次年にうつし植べし、活やすし。

盆に花草をうふるに、下の穴を、ひろくうがつべし。せばければ、水濕とぐまりて花草さかへず。ある

ひは枯かれやすし。蘭はことに濕をおそる。底に小石、
あるひは、あら沙を入べし。水濕もれやすし。盆は世俗
に鉢といふ物也。

柳子厚郭橐駝くわくたくだが傳ニ曰、凡植木の性、其もとは欲スレ舒ソコフ。
其培ハス欲フレ平コトヲ。其土ハス欲フレ故ヲ。其築トハ欲フレ密キヒシカラントヲ。又曰、

他植者則不レ然コトヲ。根拳而土易フ。其培フレ之ニ也。若不レ過ハ焉則不レ及焉。いふ意は、木をうふる時根をからむべからず。生れつきのごとくのびたるがよし。うふる時土をかふ事は、土のあるべきほどよき比なるがよし。すぎてふかく土を置も、土あさくして、根のあらはるゝもあじう。根まはりにあるもとの土を、あさくせずしてよし。根に土をつく事は、すぎまなくして堅固なるがよし。根をかぐめ土をかへて、土の多過おほたるも、すくなきもあじうといへる事なり。

月令廣義ニ曰、萬木みな日あてによろし。たゞ桑茶、つづじ、秋海棠は、みな日かげによろし。今案スルに、やま

ぶきもひかげよし。古人の詩に、陽にむかへる花木は、春にあひやすじと、いへることく、凡日あてに花木をうふべし。或曰、半日、日あたる所尤よし。凡樹をうふるに、平地より少たかきがよし。殊蜜柑ニみかん、くねんぼ、金橘、そてつ、櫻、つぐじなど、濕を嫌木は尤高きがよし。濕ある所は、地をほらず、たゞ下の土を細に打和らげ、根入よきやうにして、平地のうへに木をおきて、其廻りに土をかひうふべし。柳、くちなしなど、濕を好む木は、ひきよくよし。水中にも生ず。

草花の根をわかちうふるにも、正月よし。月令廣義にみえたり。たゞ牡丹、芍薬のみ、秋うふべし。

凡草花の白きと赤きとは、一所にうへまじふべからず。別所にうふべし。一所にまじへうふれば、しろきは必かるくなり。蓮、かきつばた、あやめけいなどの、紅白ある花みなしかり。

凡木をうへて後、其葉やがてことぐくおつるは、必

活つく。葉しぼみておちざるは枯る。しぼまずして落おちざるはつく。

花器 たうぐは 鑿くは、すき 鏝すき、すぐなる 尖棒とがりぼう、是は木をほるに用ゆ。ほそ根根びげある所、

これにてほるべし。長二尺と四五尺ばかりあると二やうあるべし。鐵鋏てつくは、長さ六七寸、廣さ一寸、

あるひはかぎなきも又可也。木を以て柄とす。柄のながさ一尺四寸。わがねを入べし。是を以て草木の根をほりおこし、うつし植る

によし。此器花史に出た。竹剪はさみ、木の枝をきり梢をさるによし。鐵鉤てつこう、草と

也。草をさり、又は根木杓ひしやく、鮫殼あはびがら、大小三五程そなふべし。棕しゆのろいど、絲、

是を以て花をゆひ枝をつるべし。かこの竹、花をゆひ立 小

づらの皮も又よし。紙よりもよし。水を入れてふく器也。小穴多し。和俗これを如雨露じょうろうといふ。

右の器を備へ置べし。

石灰にて小池を作る法 庭中水なき所に小蓮池を作

るには、唐臼土からうすつち、よくほしてこまかにふるひて一斗。是稻

土共 石灰、若所によりて石灰なくんば、蛤粉もよし。ふるひて 一斗。但石灰尤よし。蛤粉は、はまぐりのからをやき

たる也。かきが 白砂、こまかなるをふるひて三升。或 鹽貳

升、右四種一に合せ、よくまぜて、ふるひあはせ、

大桶のうちに入、湯をかけてこね少やはらかなる

程にして、間二日程をきて少づつ白に入、よくつき

ませ和合さすべし。其こねかげんは、うごんの粉をこぬるがごとくこねてよし。但こねて三日の後ぬるべし。即時にぬれば、和合せずしてやぶれやすし。故にはじめは、やはらかにこねて、三日の後しめりあひて、右のかげんになるがよし。先池をほりて、まはりそこをよくだるときかため、其上を赤土にてぬる。赤土は性ねばるを用ゆ。あかつちもこまかにくだき、水少くはへてかたく和すべし。しるければ、ひわれてあじう。あかつちも水をかけて、にはかにぬるはあじう。水に和して後、二三日もよくしめり合て後ぬるべし。よき比にこねて、池のうち二寸ばかりしきまはし、又よくだるときつけて、其上を右の石灰をあはせたる土を以てぬる。其あつさ一寸以上よし。うすければ損じやすし。蓮池はふかさ二尺餘。かきつばたくはいをうふるには、一尺二三寸にしてよし。あるひは泥の上に水をふかくたくはへて、魚をやしなふには二尺五六

寸よし。すでに石灰にてぬりて、鑊とてを用ひず。上に日おほひしてをく。其即日か、翌日か、少かたまりたる時、水を池に十分に満みちるほど入置、五六日過て水をさり、新水を入、又十日ほどすぎて後、水をかへ新水を入、凡三度水をかへ、鹽氣盡つくる時水をさり泥を入れて、蓮、かきつばた、あやめ、くはいなどをうへ、水を入、或は魚をはなつべし。池のめぐりには、石を置いて、石灰を石にぬりかけてよし。北ふさがり南にむかへる所よし。はげしき寒氣にあたれば、石灰くづれやすし。くだものは、日あてよくして、風のはげしくあたらざる所をえらびてうふべし。實ある時、大風にあへばをつる故也。

園をつくり、木をうふるには、花果をおほくうふべし。花をうふるに、前後次第をなして、四時十二月つねに花たえざるやうにうふべし。歐陽公の花をつふる詩に曰、淺深紅白宜ク相間ヘダツ。先後仍須テ次ク

第^ニ裁^一。我欲^ニ四時携^レ酒去^一。莫^レ教^ル。一日不^ニ花開^一。
又園中には、所々^{みち}徑をひらくべし。前漢の蔣詡は、
園に三徑をひらく。宋の楊誠齋が詩、三徑初開是蔣
卿。再開^ニ三徑^一有^ニ淵明^一。誠齋奄有^ニ三三徑^一。一逕花
開^テ一逕行^ク。

いにしへの君子、蘭菊松竹梅水仙蓮などを愛し、あ
るひは松竹梅を歳寒の三友とし、玉梅臘梅水仙山
茶を雪中の四友とし、又薛文清は、竹梅蘭菊蓮を
五友とす。是みな其草木の芳潔^{はうけつ}にして、節操ある
事、我が心の洒落^{しゃらく}なるに、よく相叶へるを以てな
り。

下^ス種^ヲ

農政全書曰、樹木の種^{たね}を植るに、よく熟して實の入
たるを用ゆべし。垣の下の陽にむかへるあたゝか
なる所に、深く廣く穴をほり、牛馬の糞^{ふん}と土と等分
にあはせ、穴の底に平にしき、實のところがりに

してうへ、又右の糞土を以て上をおほふべし。一切草木の種子よく實のいり、よく熟したるを取て、ふくべへ或瓶へに入れて高き所に懸かけおくべし。凡草木菜蔬皆種をまく時に及て、遅おそからしむる事なかれ。又はなはだ早きもあしう。種をまく所は高さがよし。種をまくときは、必空はれたるときよし。雨中よろしからず。三五日の後雨をうるをよしとす。種まきて後。日てれば生せず。しきりに水をそぐべし。

農政全書曰、凡物の種、臘しほすの雪水を用ひてひたせば、蟲くはず。又鰻うなぎの汁しろにひたすもよし。

凡種子をうふるには、いまだうへざる前に、地を數返熟耕し、うねおもてを平直にして、塊つちくれをこまかに碎くつき、漫種まんするには糞を漫散して乾し、粗其上を淺ちらしまきく耕すがごとくにして種ちらしをうふ。漫種せずして溝種みぞうへするには、すぢをあさくほりて、其溝に糞を布しき乾して後うへてよし。いづれも種たねに糞土を拌まぜてう

ふ。或物によりて其上に少土をおほふ。其物のよろしきにしたがふべし。又沙地を數度耕せば、地氣ぬけて地力よはし。地によるべし。

種をまきて生じかたき物は、益に細土を入れて植べし。土をおほくおほふべからず。生長して後うつし植べし。實のこまかなるものは、土を少もおほふべからず。種をまく所のまはりに、草木なきがよし。

凡花菓をうふる事を好まば、必先種子をうへ、枝をさし、根をわかち、取木をすべし。實うへも、さし木も、生長して花をひらき、實をむすぶ事はやし。財をついやして草木をかひ、人にへつらひて花樹をもとめこふは、はやく種子をうへ、枝をさすにこかず。但物によりて苗を多く買とりて、うふるもよし。十年計は樹ノハカリをうふるにありといへる、まことニにしかり。殊桃栗などは種子をうへて、數年をへずして實のる。十年ならずしてしある物な

り。年わかき人は、ことに、後のよはひ久しければ、尤うふる事を好むべし。老たる人も、おもんばかり遠きは、實をうへて花菓を見る人多し。おもんばかりみじかき人は、年わかしといへごもうへず。たとひ、わがよはひ久しからず、或他所にうつりて、わがうへ置き花菓を見ずとも、遺恨なし。なごか他人のたのしみとならざらんや。わがたのしみとならずば、後人のためとおもふべし。見ぬ世の春を人のしのぶも、わがたのしみと同じかるべし。趙白雲が仁杏をうふる詩に曰、白髮移ス根都謂テレフ。晩フツシト何時及ノ見ルニ子垂ニ々一。老父只欲ス添ントニ種シヨク植ク。不レ問ニ開キレ花結フレ子時ニ。これ木をうへて、生長するを以て樂とす。花菓を見るを以、期とするにはあらず。

挾サス 枝ヲ 壓トリ法キ附ン

さし木をするには、正月の末尤よし。二月も又可也。

物により、萌芽めどちのをそく出る木は、三月もよし。めだちのまへよし。先肥地を和かに、細かにして、畦うねをなすべし。或田土赤土のねばきは、尤よし。凡こえてねばき土の少濕ある所よし。小石と土くれをさるべし。水を澆かけて地をさだめ、樹の芽はじめて生せんとするとき、梢の肥てうるはしき小枝を、長一尺餘に切て、本末を馬の耳のごとく、片そぎにそぎて、先別の小枝を以土をさす事、ささんとする枝の、半分過さして、其あとにさすべし。其後土を置、まはりをかたくつくべし。每穴相去事一尺許、上に棚たなをかけ、こもをおきて、日を蔽おほふべし。又樹こかげにもさすべし。日にあたるをいむ。さして後四五日に一度必水をそくぐべし。一月の後は、まれに水をそくぐも害がいなし。冬は霜覆おほひをすべし。長ずるを待てうつし栽べし。

月令廣義ニ曰、二月の雨ふるとき、萬の木の枝をさせば生ず。又二月上旬に、諸の果木等の枝を、芋いもか

大根こんか蕪かよらにさして、地に埋うごめば生なず。子みをうふるにまされり。

樹の枝を挿さす法 枝の末を馬耳のごとくそぎて、白斂れんの末と墨とをすりあはせ、そぎたる所にぬりてさす。先下に石をしき、其上に土をおき、さして後まはりをも、土にてつき立べし、必活く。凡さし木は、ふかく土中に入べし。土より上の枝、長ければ生じがたし。土より上を短くすべし。枝葉多おほければあじう。

挾さしてよく生ずる物 楊柳、杉、檜、唐杉、柏、桐、

山礬ちんちやう、木芙蓉、薔薇、月季花ちゆうしゆん、無花菓いちぢく、樅もみ、迎春ワウバイ、花、海棠、山茶つばき、杜鵑花さつさき、梔くちなし。

樹枝をさすに、枝のきはに、こぶのごとくなる所あり。其所を用てきりてさせば、其こぶより根出て、かならず活つく。櫻にこぶに多し。かやうにすれば、櫻もさしてよく活つく。

凡數少なるさし木は、箱のそこに穴をあけ、赤土を

入てさし、陰地におくべし。

挾枝さしきの土こしらへ様 赤土、黒土、沙、焼酒ノ粕、右等分に和合し、水にてこねてこれにさし、三四日に一度水を澆そいぐべし。はやく根生ず。

農政全書曰、木をさすに三月上旬、菓木の直なるよき枝、手の大指の大きさのごとくなるを、長さ五寸斗きぼに切て、芋いもがしらにさして土にうふ。或大なる蕪の根にさすもよし。

又曰、春花半開く時、枝を切て、蘿蔔根だいこんにさし、土を花盆のうちにみてく、これをうへ、時々水を澆そいぐ。花すぐれば則根生ず。

壓條トリキは、本樹の下枝の土にちかきを半分きりて、引たはめ、木の鈎子かぎをかけおき、其枝の高下にしたがひて肥土をよせ、其枝上にも土を五指のふかさほごかけ、枝の本の半分には土をかけ、末の方半分は、土をかけずしてあらはし置べし、肥水をときごき其枝の土に澆そいぐべし。梅雨のとき枝葉しげり

て、其枝より根必生ず。次年、青葉はじめて萌きざすとき、本根に連なる所を切て、九月中の後うつし栽べし。

月令廣義云、梅雨の時、肥土に芙蓉、石榴、櫻桃ゆすらなどの枝をゑらびて挾さすべし。○梅雨の時、山礬さんちやうこくちなし、水梔、躑躅つひひ、柏、つばき、わうばいなごさすべし。

接ツグ樹ツ

農政全書ニ曰、木をつぐには、つぎほのよきをゑらぶべし。二年になる若枝の、肥て盛なる、陽にむかへるをよしとす。鋸のこぎりは、細なるを用べし。小刀は、よくきくを用ゆべし。大かた春分の前後につぐべし。農政全書三十七卷に、つぎやうつまびらかなり。可レ考。

農政全書ニ曰、木をつぐに、しめやうゆるからず、急ならず、心をくはしくして、はかりはかるべし。つぎほの皮は、臺たいの皮に對し、つぎほの骨

は、臺の骨に對すべし。

又曰、春以後木をつぐべからず。夏至以後木をうふべからず。

又曰、正月下旬、梅、桃、杏、梨、李、棗、栗、柿、楊梅をつぐべし。二月上旬、だい橙、みかん橘、くねんぼ柑、柚をつぐべし。金橘は遅おそきがよし。○今案するに、木をつぐに、時節これを守るべし。凡木をつぐには、花の前と芽めの前をよしとす。王昏抄曰、木をつぐには、生意す下にうごきて、いまだめだち出ざる時、先サキたどず、をくれずして、つぎやすし。

臺木大なるは、高くきりてつくべし。小きは、ひきくつぐべし。つがんとする時、つぎほを口中にふくみ、あたためて、生氣をたすくべし。

農政全書曰、臺木一本に、つぎほ二つつぐべし。二つともに活て、葉生るときに、一枝よはき物をさるべし。

つぎ木の臺高きは、つぎほ長く切て、其本をさし木

のごとく土にさして、末をつぐべし。

樹をつぐに、日あての方、南にむかへる、うるは
しき高き枝をきりて、客木としつぐべし。實多^{おほ}
し。日かげの枝を用べからず。

接木^{ツギ}の枝を、遠方より取寄するに、小箱に土を入、
枝を横にうつしてよし。數十日をへてもかれず。

或人曰、木をつぐに、成ほど臺をひきく切てつぎ、
客木のかくるほど土に埋みてよし。

或曰、牛の涎^{よだれ}をとりて、樹をつぐ時、つぎほに是を
つけて用ゆ、活^{つか}ざる事なし。本草綱目に、牛涎を
とる法あり。

物類相感志^ニ曰、桑の木に、楊梅をつげば不^ス酸^{カラ}。又
種樹書^ニ曰、桑に梅をつげば、酸^すからず。又曰、桑
に梨をつげば、甘美なり。

胡桃の枝を、柳の臺につげば、つきやすく、はや
くみのる。墨莊漫録

樹大にして、花さきみのらざるは、切てつぐべし。

銀杏の、みのらざるは男木也。花きりてつぐべし。

接木のだいよりひこばへ出ば、はやくつみさるべし。接つぎほつきて後も、ときぐ心かけて、ひこばへをつみさるべし。若花を去ざれば、つぎほ枯る。或かじけて長せず

護 養

月令廣義ニ曰、五菓の樹、花盛なる時、霜にあへば實なし。雨初てはれて、北風ふく夜は必霜あり。かねて糞草を集て、風上に焚てふせぐべし。あるひは此時おほひをすべし。

正月に、一切の果木の、しげり過たる小枝、かれ枝を去べし。名花譜

二月に、諸果木に培つちかふべし。月令廣義

春の社日に、くだ物の木の下をつきかたむれば、實なりてをちらず。又實のらざるも、かやうにすれば

みる。

橘みかん、柑くねんばの類の下枝をきるべからず。他の果樹も又しかり。但し橘の類、尤不可也。櫻も枝をきればさかへず。されども諸菓樹の下枝、ちいさき乳枝は、きりさるべしと、園史にも見へたり。

凡、植木の烈日をおそるゝは、殊に夕日にあたることをいむ。朝日はいたまらず。半日日にあたるをよこす。

橘、橙だい、機樹かんでなどは、根に土を厚く培てよし。枯んとする木もつく。又おほく培へば、木によりていたむ。一槩がいにすべからず。

果木を蟲食するに、芫花をむし穴の中に入れて、すなはち除く。或キ百部葉シを入るも可なり。又杉の木を小釘にけづり、木の穴をふさげば、蟲死ル。

事林廣記に出たり。芫花はしけいしゆといふものなり。

凡、木の寒をおそるゝ物、冬初其根にあつく土をかふべし。馬糞をおくもよし。又こもにて、木のま

はりをつゝむべし。

凡、花の多からん事を求めば、十一二正月の間、其木の根に肥土を三寸か、五寸か、つちかふべし。餘月は、つちかふべからず。園史

凡、草木に蟲つきたるには、うなぎの煮汁を澆そいぐべし。又よしみ柴といふ木の葉を、せんじてそぐべし。園史曰、樹下にみちず蚯蚓穴あらば、あひるの糞、或は灰水をそぐべし。

橘、柑くねんぼ、柚、橙だいじくの類、十一月、十二月、根まはりより、遠く枝の末の下を、ひろくあさくほりて、糞をおほく置べし。他月は、うすき糞水を澆そいぐべし。農政全書

ニ出たり。他月濃糞こきを多くおけば、木いたむ。凡樹木の根まはりに糞をおく事、枝の末のどをりの下を、鍬のよこはらにて土をかきのけて、糞をおくべし。つゝしんで、鍬のさきにて、ほりて、ほそ根をきる事なかれ。ほそ根をされば、はなはだいたみ、或かるゝ事あり。ほそ根をきらんよりは、糞

をおかざるがよし。

花を催すには、鳥糞を水にととのへそくげば、花三四日早くひらくよし、月令廣義に見えたり。

凡、草木のこやしの事、人糞いばり、洗浴の水、鳥糞、雞糞、魚の洗汁、ほし海鯧魚いはし、かまごの灰はい、死猫、死鼠みそ、溝泥、河の泥、せくなぎの泥水、米しろ泔みづ、油かす、せんじ茶滓、豆腐のかす、竈の焼土、くさりたるすくかや、くさりわら等、各其物にしがひて、よろしきあり、よろしからざるあり。ゑらび用ゆべし。夫花はいたりてきよく、糞はいたりてけがらはし。糞を以花をやしなふは、たとへば、魚を以錦をあらひ、石を以玉をみがくがごとし。不善人は、善人のたすけとなるがごとし。凡、木の根下のわかばへを、時々きりさるべし。又木のまはりは、常に草をとりて清くすべし。種樹書二曰、木にこへをするには、人糞の久しきをへたるを用ゆべし。臘月にこへするによろし。糞二

分、水一分、やはらげ用ゆ。○又曰、草の類に、こへをするには、正二月は、五分の糞、五分の水。三四月は、四分の糞、六分の水。五月は、三分の糞、七分の水。六七月は、二分の糞、八分の水。八九月は、四分の糞、六分の水。十月十一月は、八分の糞、二分の水。臘月は、水をくはへずしてよじ。○又曰、二三月、樹木すでにわか枝を生ずる時は、新根も又生ず。此時こへをすれば、根いたみて枯る也。棗などの類、めだちのいまだ生ぜざる物はくるしからず。五月梅雨の時、木の根にこへをすべからず。根くさる。八月も又あじと。八月に雨ふりて、ほそ根を生ず。こへをすれば枯る。六七月は、うすきこへをかるくして、くるしからず。一切の樹木に、こへを置には、十一二月正月によろじ。餘月は皆あじと。灰と糞と土に和し、或は油かすを土に和して、こへをすべし。其上に水を少澆そとぐべし。

園史_二曰、凡草木のめだち出るとき、糞をそぐべからず。其根をやぶる。花ひらく時も、糞をそぐべからず。糞をそぐには、水をませてよし。はなはだこきはあしう。久しき糞尤よし。五月梅雨にこへすべからず。根くさる。八月雨ふるときわか根生ず。此とき糞_{こやし}すべからず。

農政全書_二曰、樹の蟲をころすには、硫黄_{ゆわう}をよく細末して、河ごろ少ばかり和して、蟲の穴をあまねくふさぐべし。穴多して細なるは、あまねく其所にぬるべし。又硫黄雄黄_{あわう}を用ひて、烟となして、花をふすべてよし。或桐油の紙を用ひて、火にもやして、花をふすべし。木に毛蟲を生ずるは、なまぐさき魚のあらひ汁を根にそぐぎ、或蠶_{かひこ}の糞を根にうづむべし。

園史_二曰、このみのはじめてなる年、僧尼のためにふれらるれば、つひに又みのらず。

木の葉枝に簍_{みの}蟲つけば、其木いたむ。ときぐくこれを

取さるべし。又蝸牛かたつむりおほば多くつきて枝をくへば、其枝枯る。必これを取去るべし。草の葉をもくふ。凡草木に蟲生じては、其葉いたみてさかへず。必取るべし。或曰、いりこを木の枝にかくれば蟲死す。暑熱のとき、草木に水をそぐぐには、朝夕よし。日中をいむ。晩に地氣いまださめざるとき、水をそぐぐべからず。早朝にそぐぐをよしとす。

養老新書ニ曰、果木の枝に節ありて、鶴の膝ひざふしのごとくなれるあり。八月の間、牛羊の糞に土をませ、木の鶴膝ひざの所をつみ、碗の大きさのごとくにし、其上を紙を以てつみ、袋を以てこれをおほひ、麻にてきびしくからげまどふ。重ければ、杖を以て地につかじめ、明年花をひらき、實をむすばしむ。夏秋の間、心みに一包をひらきてみるに、其根生せば、其本をたち、別に土中にうふべし。

花譜 卷之上 終